

作を誘発し兼ねない状況である。

### 5.1.7 現状評価

#### (1) 既設発電所全般

運転開始以来、全ユニットが30年、20万時間以上の運転時間を有しているにも関わらず、Figure 5.1-7 から年間の平均運転時間が6,000時間を超える年が多いことが分かる。

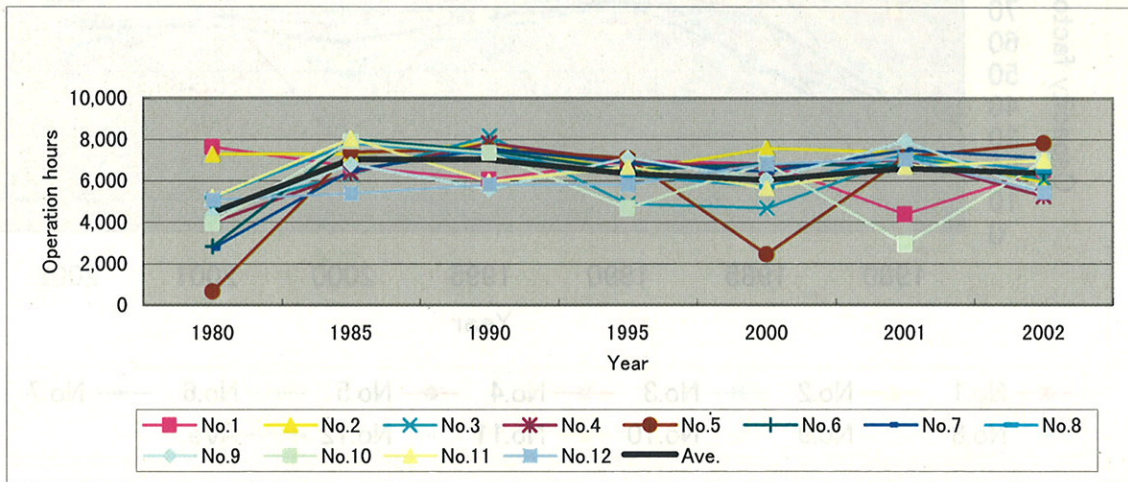


Figure 5.1-7 ユニット運転時間

運転時間ベースの稼働率も Figure 5.1-8 の稼働率の推移グラフが示す通り高いユニットで80%以上、2000年は特に5号機が低稼働率であったにも関わらず全ユニット平均でも70%近い高水準を維持している。

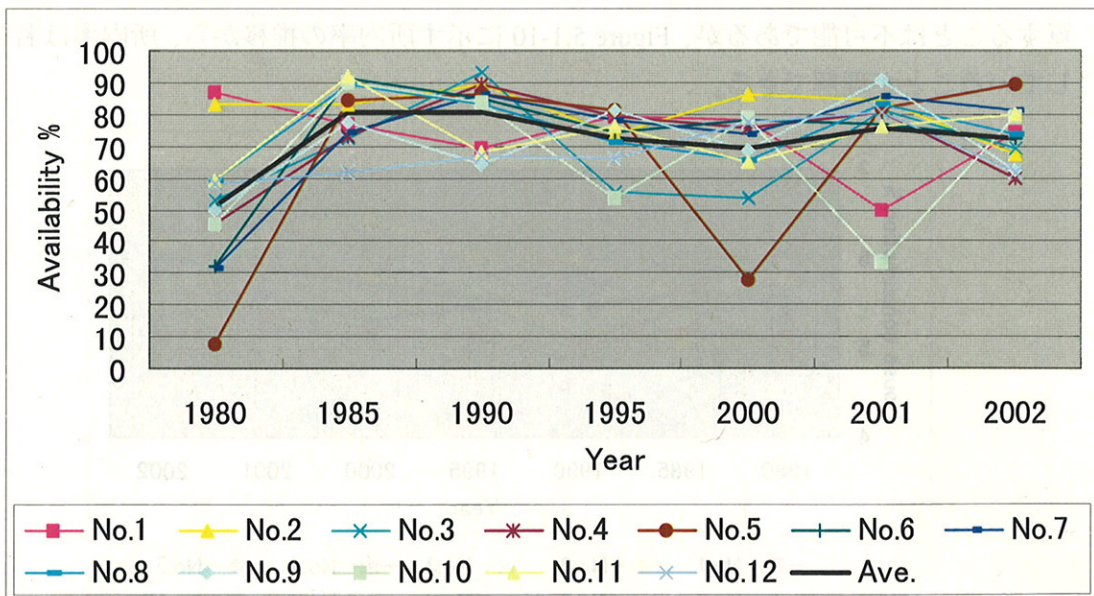


Figure 5.1-8 運転時間ベースの設備稼働率の推移

また、Figure 5.1-9 の示す通り、発電電力量ベースでも平均して 60%を超える利用率を維持していることが分かる。

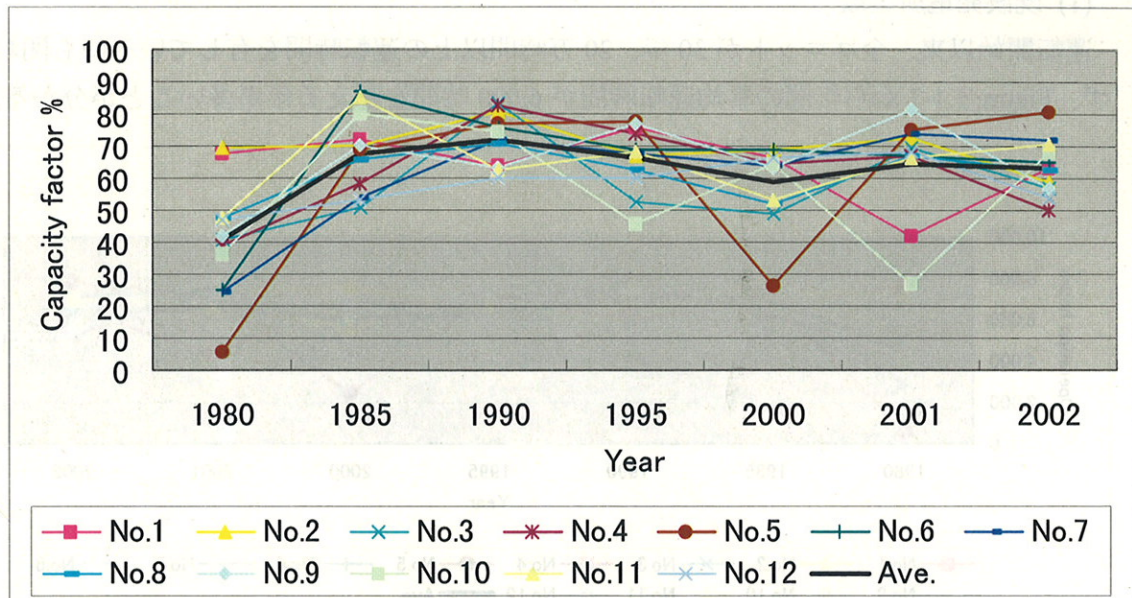


Figure 5.1-9 発電電力量ベースの設備利用率の推移

ボイラー周辺では空気、排ガス、タービン周辺では水蒸気の漏洩状態を認識できるものの、どの程度の量が漏れているのか計測する手段がなく、またファンやポンプ等の補機類の電流値データを記録していないため、各種流体の漏洩に伴う補機動力の増加分を計算することは不可能であるが、Figure 5.1-10 に示す所内率の推移から、所内率は若干上昇していることが理解できる。

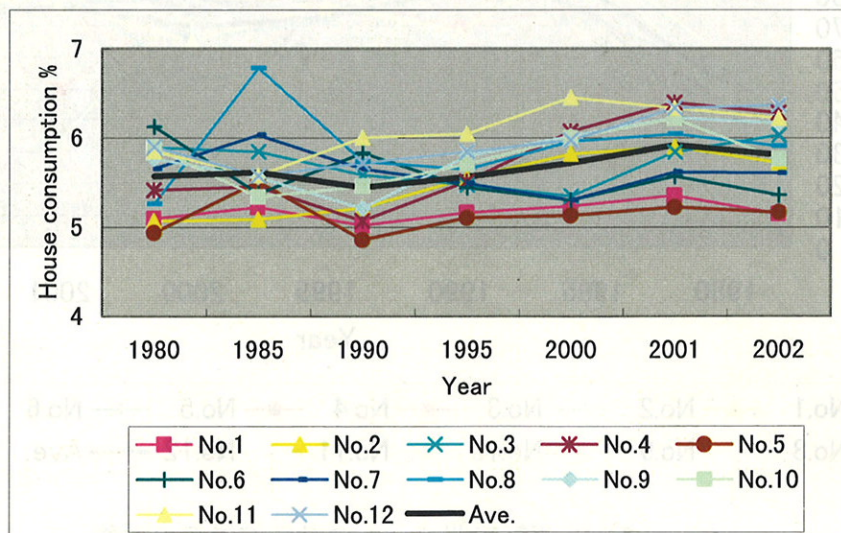


Figure 5.1-10 所内率の推移